

I 推定第2次内裏北方官衙地域の調査（第129次）

調査区は推定第2次内裏北外郭官衙地域の東北方で、平城宮北面大垣のすぐ南に位置する。地形的には南にのびる支丘の東縁にあたり、東側が大きな谷になる。北には北面大垣の位置にあたる堤防をへだてて水上池がある。

遺 構

調査区の土層は上から旧耕土・床土、茶褐色粘質土（約20cm）、礫混り灰褐色砂質土（20～40cm）、黄灰褐色粘質土（10～20cm）及び地山の黄褐色粘質土に区分できる。このうち、礫混り灰褐色砂質土は調査区西辺をのぞいてほぼ全体にあり、東に厚い。奈良時代のほか中世の遺物を含む。黄灰褐色粘質土は調査区中央部から南辺にかけて残る奈良時代当初の整地土である。主な遺構はこの整地土及び地山面で検出した。検出面は東及び南に向かって低くなっている。比高差は西と東で約2m、北と南で約0.5mである。

検出した主な遺構は掘立柱建物16棟、掘立柱塀2条、溝11条、井戸1基、焼土ピット5基、土壇9基などである。これらは奈良時代を中心としてそれに前後する時期に属し、遺構の新旧関係や配置などから大きく5期に区分できる。

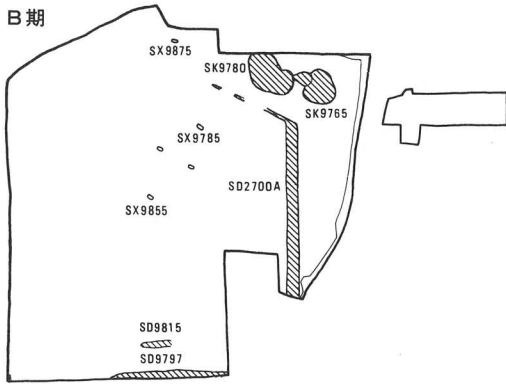
A期 調査区北東部に溝2条（SD 9766・9775）、土壇4基（SK 9726・9735・9738・9742）があるが、まとまりに欠ける。

SD 9775は幅約0.6m、深さ約0.2mの東西溝で、西に流れる。底に小礫をまばらに敷いている。SK 9735は東西約8.7m、南北約9.9m、深さ約0.4mの不整形な土壇である。黄灰褐色粘土質で埋めているが、底に暗灰色粘土質の堆積があり、一時期滞水していた可能性がある。

B期 南北大溝SD 2700 Aと東西溝2条（SD 9797・9815）を設けた時期。焼土ピット5基（SX 9785・9855・9860・9870・9875）、土壇5基（SK 9761・9765・9780など）はこの時期に属するが、建物はない。

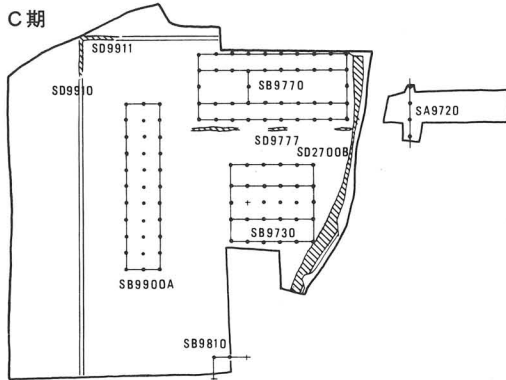
SD 2700 Aは第21次調査で検出している玉石積の東大溝SD 2700の北端部にあたる。素掘りである。幅約2.0m、深さ約0.5m。北端は西に折れ、幅0.3m

B期



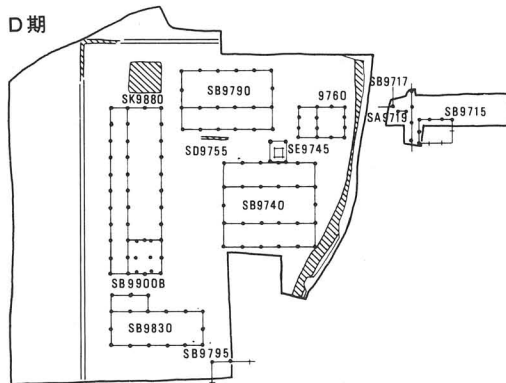
と細くなる。底にはわずかに暗青灰色砂質土の堆積があるが、短期間で埋め戻している。SD 9797 と SD 9815 は調査区南端を平行して東に流れる。SD 9797は幅約1.1 m、深さ約0.2 m。SD 9815は幅1.2 m以上、深さ約0.2 m。両溝の間(約3.5 m)は道路かもしれない。

C期



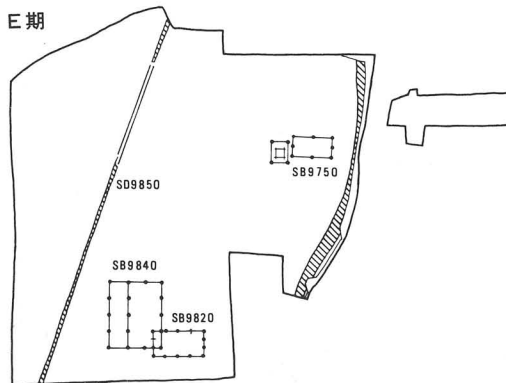
焼土ピット5基は調査区北辺に5~12mの間隔をおいて散在する。平面形はいずれも隅丸の長方形である。底はほぼ平坦で、側壁は幾分上に向かって開く。側壁と底の一部は赤く焼けており、底には炭・灰が厚いもので20cmほど堆積している。遺存状態の良いSX 9875は長さ約1.0 m、幅約0.5 m、深さ約0.5 mである。用途は明らかでない。

D期



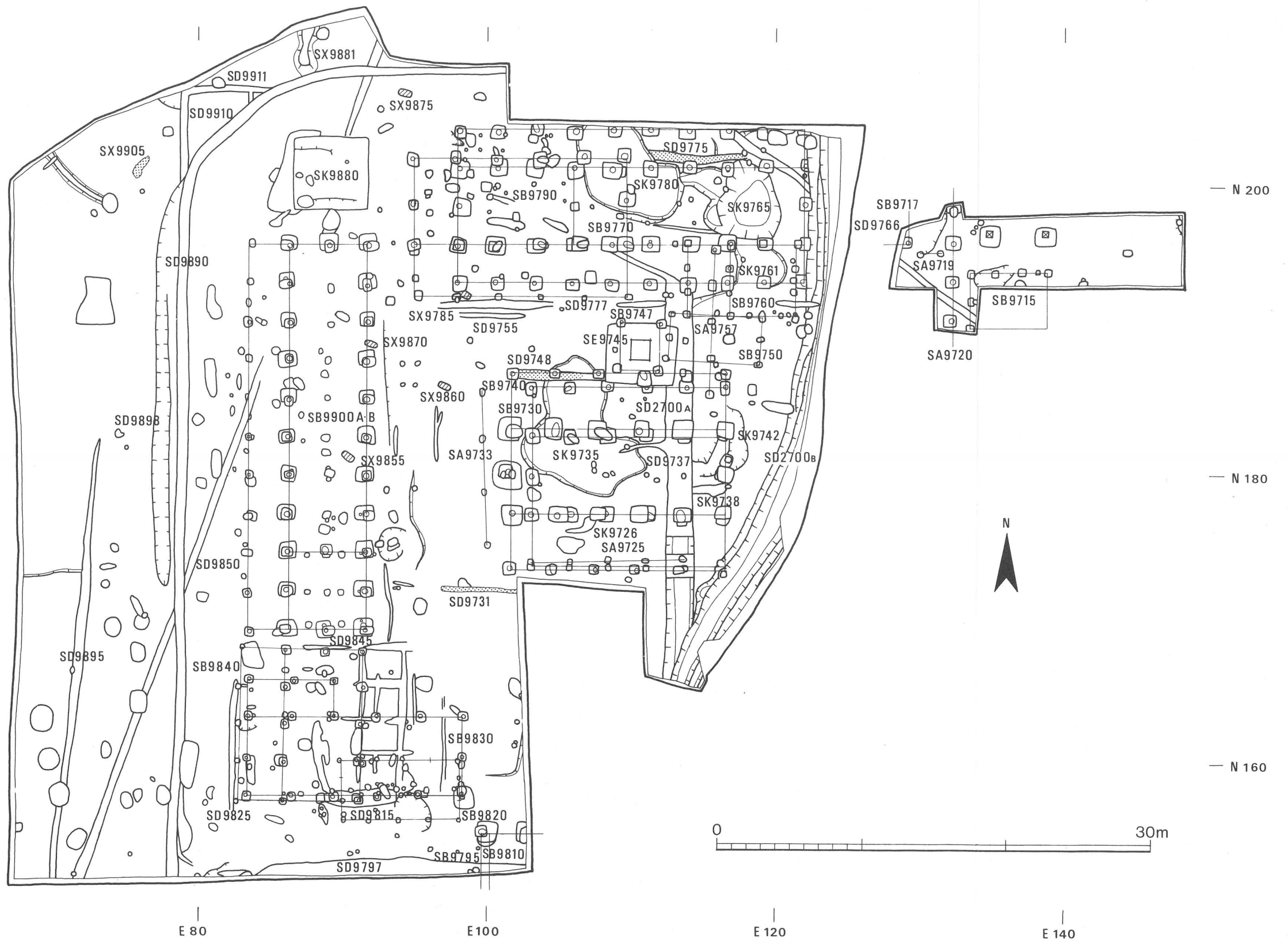
土壙5基は調査区北東部にあり、いずれも埋土にかなりの量の炭・灰、及び焼土を含む。焼土ピットの炭・灰を廃棄したのであろう。SK 9780は6.6 x 6.0 m以上、深さ約0.6 m。

E期



このほか調査区北端で積土の痕跡 SX 9881を検出した。付近は攪乱が著しいが、この東約15mの地点で実施した立会調査で高さ約0.8 mの積土(大略5層)を後述する東西溝SD 9911付近まで確認した(南北約6 m)。また、北面大垣の痕跡である水上池の堤防の南側は、一段低い带状の高ま

第2図 第129次調査遺構変遷図



第3図 第129次調査遺構図

りとなっている。SX 9881 は北面大垣 SA 2300 の内側の犬走りなのであろう。

C期 SD 2700 A を SD 2700 B に改め、その東に掘立柱塀 SA 9720、西に掘立柱建物 4 棟 (SB 9730・9770・9810・9900 A) を配した時期である。建物群の北は東西溝 SD 9911、西は南北溝 SD 9910 で画す。

SB 9730 は南北に廂がつく 5 × 4 間の東西棟。床束の痕跡から身舎は床張りである。柱間は身舎の桁行と梁間が 9 尺等間、廂の出が 12 尺。SB 9770 は南と北に廂がつく 9 × 4 間の東西棟。身舎は西 3 間分を仕切る。柱間はいずれも 9 尺等間。SB 9770 の南約 1.5 m には雨落溝 SD 9777 がある。幅約 0.4 m、深さ約 0.1 m。SB 9810 は北側の柱穴列を検出したにすぎないが、東に SD 9800 B が存在すること及び後述する地割の問題から、桁行 4 間 (9 尺等間)、梁間 2 間 (12 尺等間) の東西棟と推定する。SB 9900 A は 10 × 2 間の床張りの南北棟。柱間は桁行・梁間とも 9 尺等間。SA 9720 は南北塀で、3 間分 (9 尺等間) を検出した。

SD 2700 B は最大幅約 2.2 m、深さ 1.5 ~ 1.7 m の素掘りの大溝。東に現水路があるため一部を発掘した。堆積土は 3 層に大別できる。下層は 6 層あり、下から灰白色砂、黒褐色粘質土、灰色砂、暗灰色砂バラス、暗灰色粘砂土、暗灰色粘質土。中層は 2 層で、下から青灰色砂礫、灰色砂質土。上層は 10 世紀から・中近世紀まで存続する。SD 9910 と SD 9911 は調査区北西部で接続部分を検出した。SD 9910 は幅約 0.5 m、深さ約 0.2 m。SD 9911 は幅約 0.4 m、深さ約 0.2 m。

この時期の遺構は 9 尺 (1 尺 = 29.7 cm) 単位の方眼で地割りし、これにあわせて建物を整然と配置している。すなわち、建物群の東西を画す塀 SA 9720 と溝 SD 9910 の心々距離は約 53.5 m (180 尺)。南限は不明だが、北を画す溝 SD 9911 心と SB 9810 の推定南側柱列までの距離は約 58.8 m (198 尺) に復原でき、さらに SB 9810 の南北中軸線は SA 9720 と SD 9910 間の南北中軸線にそろえている。

他の建物 3 棟は南北方向が 9 尺方眼地割にのる。SB 9730・9770 は中軸線と柱筋をそろえて南北に並び、SB 9900 A は北妻が SB 9770 の身舎南側柱列、東西中軸線が SB 9730 の身舎北側柱列にそろえる。また、SB 9730 の身舎南側柱列は、SD 9911 と SB 9810 の南側柱列間の東西中軸線上に位置する。ただし、東西方向は

9尺方眼地割に対してSB 9730・9770が東に1尺、SB 9900 Aが西に2尺ずれる。SB 9730・9770の南北中軸線は、SA 9720とSD 9910間の南北中軸線より東約4.3m（14.5尺）にある。

D期 C期の建物4棟をほぼ同位置でSB 9740・9790・9795・9900 Bに建て替え、新たに小規模な建物4棟（SB 9715・9717・9760・9830）と井戸SE 9745を設けた時期。SA 9720、SD 2700 B・9910・9911はこの時期にも存続する。

SB 9740は南と北に廂がつく5×4間の東西棟。東妻及び身舎南側柱筋はC期のSB 9730の位置を踏襲する。柱間は身舎の桁行・梁間が10尺等間、廂の出が13尺。SB 9790は南に廂がつく5×3間の東西棟。身舎南側柱筋はC期のSB 9770の位置を踏襲する。柱間は身舎の桁行・梁間が10尺等間、廂の出が12尺。SB 9790の南約1.3mには雨落溝SD 9755がある。幅約0.2m、深さ約0.1m。SB 9760は3×3間の東西棟で、西1間を仕切る。北側柱筋はC期のSB 9770の位置をほぼ踏襲する。柱間は桁行が西から10尺、7.5尺、7.5尺、梁間が5.5尺等間。SB 9795は北側の柱穴列を検出したにとどまる。C期のSB 9810と同様に4×2間の東西棟と思われる。柱間は桁行が10尺等間、梁間が12尺等間になるう。

SB 9900 BはC期のSB 9900 Aを同じ位置で建て替え西に廂をつけた10×3間の南北棟。身舎の南2間分を仕切り、この部分だけ床張りとする。廂の出は9尺。SB 9840は5×2間の東西棟で、西2間分だけ庇が付く。柱間は身舎の桁行が10尺等間、梁間が9尺等間。廂の出は9尺。SB 9715・9717は調査区北東部にあり。SB 9715は3×2間の東西棟。柱間は桁行が6尺等間、梁間が6.5尺等間。SB 9717は東南隅の柱穴を検出したにとどまる。西にSD 9800 Bがあり、小規模な南北棟と考えられる。この東に東西1間（10.5尺）の掘立柱塀SA 9719がある。

SE 9745はSB 9740の北にある方形の井戸で、井戸屋形SB 9747をともなう。井戸枠は幅約27cm、厚さ約5cmの板材を井籠組にする。8段まで残っていた。一辺約1.3m。井戸掘形は5.1×4.3m前後、深さ約2.7m。底は井戸枠ぎりぎりに1段（深さ約35cm）掘り下げている。SB 9747は1×1間。柱間は南北が11尺、東西が9尺。北東と東南の柱穴には人頭大の石を据えていた。

なお、SB 9900 B の北で 10.6 × 10.2 m 前後、深さ約 0.3 m の方形の土壇SK9880 を検出した。底は凹凸がある。埋土は 1 層で、短期間に埋め戻している。

E 期 小規模な建物 3 棟（SB 9750・9820・9840）、溝 1 条（SD 9850）などがある。いずれも平城宮の造営方位と異なる。SD 2700 B 及び SE 9745 はこの時期にも存続する。

SB 9750 は 2 × 2 間の東西棟。柱間は桁行が 10.5 尺等間、梁間が 5.5 尺等間。SB 9840 は西に廂がつく 4 × 3 間の南北棟。柱間は身舎の桁行・梁間が 9 尺等間、廂の出が 10 尺。SB 9830 は SB 9840 の廃絶後に建つ 4 × 3 間の東西棟。柱間は桁行が 7 尺等間、梁間が中央間 6 尺、両脇間 4 尺。

SD 9850 は調査区西辺を南西に流れる幅約 0.6 m、深さ約 0.5 m の斜行溝である。このほか掘立柱塀 3 条（SA 9725・9733・9757）はこの時期に属する可能性があるが、性格は明らかでない。SA 9725 は 4 間（8.5 尺等間）、SA 9733 は 3 間（12 尺等間）の南北塀、SA 9757 は 4 間（9 尺等間）の東西塀である。

遺物

主として SD 2700 B から木簡、木製品、金属製品、土器及び瓦が出土した。

木簡は計 171 点で、すべて SD 2700 B から出土した。文書木簡、付札、習書がある。このなかには天平 8 年の可能性があるもののほか、天平 12～19 年の紀年木簡が 6 点ある。以下、主な釈文をかかげておく。

1. 車持宅良

女孺 倭畫師大虫 天平十八年潤九月廿四日

2. 次長 高市息繼 ^[中臣カ] □□
 ^[紀三カ] □□□ 安曇廣刀自 □

3. □申陪從□□

4. 南無龍自在王佛

5. 昨夜^[風カ] □□急今□□飛故京千万里誰為送^[寒衣カ] □□

6. 參河國^[播カ] □豆郡析嶋海部供奉二月新御贄佐米楚割六斤

7. 苦田郡林田郷^[醬カ] □大豆五斗進上

8. 備前国邑久郡旧井郷秦勝小國白米五斗

瓦のうち軒瓦は計 117 点で、平城宮第Ⅰ期（和銅元年～養老 5 年）、第Ⅱ期（養老 5 年～天平 17 年）、第Ⅲ期（天平 17 年～天平勝宝年間）のものがある。主体を占めるのは第Ⅱ期の 6225-6663 型式の 1 組（25 点）、第Ⅲ期の 6282-6721 型式の 1 組（46 点）である。

土器には土師器、須恵器及び黒色土器などがある。SD 2700 Bからは各器種のほか漆付壺、竈、墨書土器が出土した。墨書土器には天平 18 年の紀年と「少属川原蔵人」・「舎人安曇万呂」などの人名、「美濃安八郡壬生郷」・「□□道來道□田木郷」などの郡郷名を記した大型の須恵器蓋 1 点のほか、「大膳」、「判」、「井」など 1 字ないし 2 字を記したものなど計 14 点がある。

木製品は SD 2700 B から祭祀具（人形、削り掛け、刀形、鏃形）、容器類（曲物、刳物の箱蓋、籠）のほか、糸巻き、工具柄、杓子、横櫛、桧扇、琴柱及び「天平」の墨書がある題籤転用品が出土した。また SE 9745 の埋土から削り掛けや曲物の底板が出土した。金属製品は SD 2700 B から墨漆塗りの青銅製鋌及び青銅製尖頭棒が各 1 点出土。銭貨は元祐通宝と寛永通宝各 1 点出土した。

まとめ

A～E 期の実年代を比定し、あわせて平城宮におけるこの地域の性格について言及しておこう。

まず、D 期の開始時期は建物の柱掘形から平城宮Ⅲの土器、井戸の掘形から平城宮第Ⅲ期の軒瓦が出土していることから天平宝字年間頃に、廃絶期は建物の柱抜取穴から出土した土器によって奈良時代末頃における。C 期は建物の柱抜取穴から平城宮第Ⅲ期の軒瓦が出土しており、D 期の開始直前までつづく。一方、B 期の廃絶期は土壙から平城宮第Ⅱ期の軒瓦が出土していることから大きくは天平年間におけるが、C 期の溝 SD 2700 B 出土木簡からみて天平 12 年頃になる可能性もある。B 期の開始時期は平城宮の造営当初頃に遡ろう。A 期は平城宮の造営以前、6・7 世紀、E 期は平安時代の初め頃に比定できる。

5 期のうち B～D 期が平城宮の存続時期にあたる。このうち、B 期は建物がな

く本格的に利用された状況ではない。C期は東西180尺、南北198尺以上の区画内に9尺方眼地割りにもとずいて整然と建物を配置した時期、D期はこれをほぼ踏襲した時期である。建物群の全体的な配置や性格については、今後の周辺地域の発掘成果をあわせて検討しなければならないが、今回の調査で明らかになった点を記しておこう。

建物群の北はSD 9911が画し、内側の犬走りをへて北面大垣SA 2300に接する。したがって少なくとも今回の調査区においては、北面大垣の南に通路がなかったことになる。SD 9911とSA 2300の心々距離は約9.3 m (31.5尺)。SA 2300の基底幅を9尺とすれば、内側の犬走りは幅が27尺になる。

大溝SD 2700 BはSD 9911が注ぐ溝としては規模が大きい。さらに、東が谷筋となることから東方から注ぐ溝の存在も考えがたい。現水路がそうであるように、SD 2700 BはSA 2300の下を暗渠で抜けている可能性が強い。その場合、現在の水上池は奈良時代にも池であったと考えることができる。SA 2300内側の犬走りの幅が広いのも堤防としての役割りを果していたことによるのであろう。

建物群の東を画す塀SA 9720は、内裏東外郭官衙の東西築地SA 705より東約40.2 mに位置し、東大溝SD 2700の東にある東方官衙の西面築地SA 2940よりさらに東に位置する。したがって、内裏東外郭官衙の東辺通路は、少なくとも今回の調査区にまで至らず途中で折れ曲っていたことになる。南限は明らかでないが、今回調査した地域は内裏外郭官衙及び東方官衙とは異なる区画割りがおこなわれていたと考える。なお、建物群の西を画すSD 9910の西には遺溝がなく、空間地であった可能性があるが、この建物群に属するの否かは明らかでない。

C・D期の建物群の性格については、SD 2700 B出土の墨書土器及び木簡からある程度推測ができる。すなわち、天平18年の紀年がある墨書土器に記載された「少属川原蔵人」には、天平17年中宮職少属から天平18年皇后宮職少属になった「川原蔵人凡」（『大日本古文書』2 - 399、9 - 139）と同一人物である。木簡に女性の名がかなりみられるのも皇后宮職との関連を暗示する。C・D期の建物群は少なくとも皇后宮職と密接なつながりをもった官司と考えることができよう。